

《論 説》

シアトル最初期の日系市民運動

黒 川 勝 利

I

本稿は、1921年に設立された合衆国西北部で初めての日系市民政治団体、シアトル革新市民協会 Seattle Progressive Citizens' League の1920年代における活動を分析することを目的としている。

1928年にクラレンス・タケヤ・アライが会長に就任してから第二次世界大戦に至るまでの革新市民協会の活動（これを私はシアトルにおける日系市民運動の第二期と呼ぶ）については、すでにかなりことが知られている。アライは、同年に発行を開始した『ジャパニーズ・アメリカン・クーリエ』*Japanese American Courier* の編集長ジェイムズ・サカモトとともに、その後のシアトルにおける日系市民の運動を指導し、カリフォルニア州の同様な組織と連携して全国日系市民協会 Japanese American Citizens League を結成し、1930年にシアトルでその第1回大会を開催した。JACL はその後日系社会における影響力を拡大し、戦後の合衆国におけるもっとも有力な日系市民団体として、日系市民の地位向上、権利の獲得のために大きな役割を演じることになる。

しかしながら、1921年の創立から1927年にかけての、私がシアトルにおける日系市民運動の第一期と考えている時期における革新市民協会の活動は、今日ではほとんど忘れられている。そればかりではない。創立当初の役員の名前すら誤って記憶されているのである。

たとえば、ポール・R・スピッカートの『日系アメリカ人』には「シアトルでは、1921年に弁護士クラレンス・アライと数人の友人が短命のシアトル革新市民協会を結成した」と記されている。『日系アメリカ人百科辞典』のJACLの項でも、1918年夏のサンフランシスコにおけるアメリカ忠誠協会 American Loyalty League の成立について述べた直後に「数年後に同じような集団がクラレンス・アライの指導の下にシアトルで結成された」と記されている。その後の文章で1923年のフレズノにおける運動が紹介されていることに鑑みると、ここでも1921年当初からクラレンス・アライが革新市民連盟の中心であったと誤解されているように思われる⁽¹⁾。

日系アメリカ人史の古典と言うべきビル・ホソカワの『二世：静かなアメリカ人』では、設立時の役員として会長にシゲル・オオサワ、書記にジョージ・イシハラ、会計にユキ・ヒガシの名前が挙げられている。これにも問題がある。シゲル・オオサワの会長は正しいが、ジョージ・イシハラとユキ・ヒガシの2人は、設立当初からの会員ではあるが、いずれも役員ではなかった⁽²⁾。

¹ Paul R. Spickard, *The Japanese Americans: the Formation and Transformations of an Ethnic Group*, New York, 1996, p.91; Brian Niiya, ed., *Encyclopedia of Japanese American History, an A-to-Z Reference from 1868 to the Present*, New York, 2001, p.219. JACLの項の執筆者はGlen Kitayama.

同じ誤りは、2000年に JACL シアトル支部によって発行された『JACL シアトル支部の歴史、1921 - 1980 年』にも引き継がれている。もっとも、この書では設立当初の「通信書記」corresponding secretary として、新たにハル・オオサワの名が挙げられている。これはかなり重要な追加である。しかしながら、会長、書記、会計の3人についてはホソカワの書と同一である。すなわちこの書では、1921年の革新市民協会が役員4人体制でスタートしたことになるのであるが、これもやはり誤りと言わざるを得ない⁽³⁾。

このように、第二次大戦後に出版された英語の文献においては、設立当初のシアトル革新市民協会の役員について軒並み誤った記述が成されているのである。

たしかに第一期における革新市民協会の活動は、第二期と比較すると著しく小規模なものであった。何よりも、政治に関与しうる年齢に達している日系市民の数が絶対的に少なく、その影響力は限られていた。したがって、第二期の日系市民運動が、もちろんこれはシアトル革新市民協会というよりも全国 JACL の運動の成果ではあるが、1931年のケーブル法 Cable Act の修正、及び1936年の同法廃止、あるいは1935年のナイ・リー法 Nye-Lea Act の制定といった大きな成果を納めたのに対して、第一期の運動にはそのような具体的な成果はなかった⁽⁴⁾。

しかしながら、第一期の革新市民協会にもまた、短期間ではあったが積極的な活動を展開した時期が存在したのである。そしてその事実は、第二期の活動が始まった1920年代末には、まだシアトル日系社会の記憶に残っていた。

革新市民協会の再建を呼びかけた創刊直後の『ジャパニーズ・アメリカン・クーリエ』の論説の中で、編集長のジェイムズ・サカモト（紙上の筆名は Jay Esse）は、「協会は数年前までは活発な組織であったが、現在は休止状態である」と述べている⁽⁵⁾。

² Bill Hosokawa, *Nisei: the Quiet Americans*, revised ed., University Press of Colorado, 2002. p.193. なお同じ193頁に、協会が1921年から1928年までの間に3回しか会合を開かなかったと記されているが、これも事実ではない。

³ Japanese American Citizens League, Seattle Chapter, *JACL, a History of Seattle Chapter: 1921-1980*, Seattle, Wash., 2000, p.2. なお、原本が1929年に出版された竹内幸次郎の『米國西北部日本移民史』（復刻版、雄松堂、1994年）の434頁では「役員選挙の結果、會長に大澤茂、理事大澤春子、會計巽清次郎氏等が當選」と記されている。これは戦後の多くの英文文献よりは事実に近い。何よりも「理事大澤春子」となっていることが重要である。ただし「會計」は、市民協会の議事録に照らして、「巽清次郎 Seijiro Tatsumi」ではなくその兄弟の「巽ヘンリー Henry S. Tatsumi」であったと思われる。また西北部日本移民史を語る上で竹内の前掲書とならんで重要な邦文文献、伊藤一男の『北米百年桜』の巻末年表では、1921年の項に「シアトル日系市民協会創立 會長大沢茂・會計巽清治郎」と記されている。ここでは會計について竹内の前掲書と同じ問題があり、また書記大澤春子が抜けている。加えて1922年の項に「荒井威弥 シアトル進歩市民協会を結成」とある。伊藤一男が聴き取りを行った戦後の一世における記憶の混乱の反映であろう。伊藤一男『北米百年桜』（日貿出版社、1973年、復刻版、PMC出版、1984年）、1050頁。なお、大澤茂も伊藤の聴き取り調査の対象になっているが残念ながら革新市民協会については語っていないようである。

⁴ Cable Act とは、外国人と結婚した合衆国女性はその市民権を喪失すると規定した法律で、1922年に制定された。明らかに女性差別的な法律であったが、その影響をもちに受けたのはアジア系市民の女性であった。白人女性であれば、男性との離婚や死別後には市民権を回復することができた。しかしながら、アジア人に帰化が認められなかった当時においては、アジア系女性がいったん市民権を失えばアメリカ国民に戻ることは不可能だったからである。また Nye-Lea Act とは、第一次大戦に従軍した約500人のアジア系復員軍人に合衆国の市民権を認めた法律である。その制定はロビースト Tokutaro Slocum の献身的なロビー活動に負う部分が多いという。 *Encyclopedia of Japanese American History*, pp.133, 318-319, 367-368. なお、Nye-Lea Bill の項は Dennis Yamamoto の執筆である。

⁵ *Japanese American Courier*, January 21, 1928.

また、その当時シアトルで発行されていた日刊紙『大北日報』の社員として同紙に「別口雑記帳」を連載していた中嶋勝治（紙上の筆名は悟街）も、1928年8月、活動を再開した革新市民協会主催の政治集会を取材し、数年前の同じような集会の様子を回顧して次のように記している。

■昨夜、ブシユホテルに於けるシアトル、プログレシヴ、シチズンズ、リーグ集會に、三十餘人の有権者は、合衆国上院議員候補者グリフィス判事と華州下院議員候補者ケートム氏の政見を聴いた

■グリフィス判事が同協會の席上、その政見を陳べたのは今回で二度目、第一回は故大澤春子嬢と、山岡譲治君が市民協會の牛耳をとり、日系市民最初の活躍時代だった。

■當時、有権者の数は十数名に過ぎなかつたが、團體創立早々、候補者の政見を聴いたのだから元気頗る横溢、春子嬢の如きは判事の政見に對して深刻なる質問を浴せ、その真率にして誠實ある答辨を得て、主客満足したこともあつた。

このように、第一期のシアトル革新市民協会にも中嶋のような指導的立場の一世が「日系市民最初の活躍時代」と呼ぶ活動期が存在したのである⁽⁶⁾。

それでは、なぜこのような第一期の日系市民運動がやがてその勢いを失い、いわば冬眠状態に入ってしまったのであろうか。そして1928年の再建、再編成を必要とするに至ったのであろうか。

ここで結論を先取りしておくならば、その最大の理由は、創立当初から書記（「通信書記」ではない）として積極的に市民協会の活動に取り組んできたハル・オオサワ、すなわち大澤春子の早すぎた死であった。ごく少数の日系市民しかいない状態で始まった革新市民協会にとって、リーダーの果たすべき役割はきわめて大きかった。それゆえハル・オオサワの死はその後の協会の活動にとってきわめて大きな打撃となったのである。

ハル・オオサワの死の直後、1923年11月12日の大北日報に中嶋は、「嗚呼第二世の先達逝く」と題して次のような追悼文を寄せている。この追悼文は、シアトル革新市民協会の活動とそれに期待していた当時の日系社会にハル・オオサワの死が与えた衝撃を示している。

■大澤春子嬢の永眠は七五の老齡にあるパイオニアの随一大澤翁の愛嬢がなくなつたといふかなしみ以上、同胞第二世の先達を失つたといふ非常な落膽を吾々に與へた

■わたくしが春子の公生涯における働らき振りをみたのはこの二三年であつた、同胞第二世の中心機關であつた市民協會幹事……、事實の主宰者として……の職についてから熱心に第二世の指導に努力した [……は原文のまま]

■市民協會の會合には、いつも先達の役をつとめて、引込みがちではつきりしない會員を奨励して第二世の責任遂行につとめていた、春子の姿が現れないと會員の元氣も會議の進捗もサツパリみることはできなかつた

■『やりさへすれば出来ないことはありません』と春子は常に私に語つてゐた、春子は實際自ら進んで断行した、逡巡姑息といふことは一大禁物で『サアやませう』と春子の一聲は宛然進軍の曲

■春子はなかへ論客、或る時はグリツフス判事を質問責めにし、ある時は山岡翁と議論を戦はして下らなかつ

⁶ 『大北日報』、1928年8月28日。

た『私はこう信じます』といひ放つと、妥協を求むるには骨が折れた、しかし春子はその主張を固守すると同時に、自らその実行の局に當り、終始一貫した

■労働問題には最も造詣深く新しい思想の一人、並大抵の男性は片つ端からやりこめられ眼を丸くしてゐた、舌端するときまさりの春子は、一方極めて親切でしとやかで、温情に満ちた女性であつた

■市民協會でも、新進婦人會でも春子のすぐれた統一の力によりて事業の成績を挙げたことは尠くない、総ての問題に當つてまづ『ミスオオサワの意見』が解決の楔子となつていた

■『春子が死な、かつたら疑もないリーダーだつたに』とは第二世男女の口をそろへた惜しみの言葉であつた、私は春子嬢の永眠を、第二世の抱負、経綸に一大打撃を與へたものと、深く惜まざるを得ない⁽⁷⁾、

ハル・オオサワの死後、シアトル革新市民協會の運動は徐々に活力を失い、中嶋のような往時を知る一世指導者たちが鬼籍に入るとともに、また真珠湾攻撃とその後の強制収容による日系人社会の混乱と苦難も相まって、シアトル日系社会の記録と記憶から抜け落ちていったのである。

ハル・オオサワは現在、シアトル郊外の丘の上にあるレイクビュー墓地の一角、父保次郎の墓碑の傍らの小さい墓石の下に眠っている。

II

シアトル革新市民協會の出発点は、ビル・ホソカワが指摘しているように、二世の自発的な動きというよりもシアトル日系社会の一世指導者たちの働きかけによるものであった。

子孫への期待は合衆国のどの移民グループにも共通したであろうが、日本人移民の場合は特別であった。周知のように、当時の合衆国の国籍法はアジア系移民に帰化の権利を認めておらず、そのことが在米日本人に対する様々な差別の法的根拠として利用されていた。1921年には、カリフォルニア州に続いてワシントン州でも外国人土地法が制定され、抜け道はあったものの、日本人農民による土地所有や借地が禁止された。嵐のような排日運動の渦中で、日本人移民は生まれながらにして市民権を持つ二世に期待する他なかったのである。中嶋の次の文章は当時の一世指導者の気持ちを良く表している。

■排日風も今や大嵐となつた、まさかと思ふてゐた、オリムピヤ [ワシントン州の州庁及び州議會所在都市] の上院にタツタ二名の排日反対者とは今更ながら呆然たらざるを得ない、形勢日々非也とは、正さしく吾々の現状を言い現してゐる

■吾々自身のやうな歸化の権能なき外國人のみであつたなら、一たまりもなく一掃せられて仕舞ふのであるが、幸に吾々の子孫は完全な米國市民であるから、彼等の権利によりて、僅かに吾々の築きかけた基礎を保つことを得るのだ⁽⁸⁾

⁷ 同上、1923年11月12日。なお、Haru Osawaの役職 Secretaryを本稿では「書記」と訳しているが、当時の日本語資料では本引用文のように「幹事」あるいは竹内幸次郎の前掲書のように「理事」と訳されていることが多い。

⁸ 同上、1921年3月7日。

市民協会の創設を中心になって支援したのは、北米日本人会の設立委員、奥田平治、堀内貞一、渡邊圭一、中嶋勝治、岡島金彌の5人であった。彼らは渡邊圭一が起草した英文規則書を審議した上で、アメリカ生まれの17歳以上の女子、20歳以上の男子に呼びかけ、1921年9月14日に日本人実業倶楽部で集会を開いた。北米日本人会からは5人の委員の他に伊東忠三郎会長が、日系市民の側からは男女合わせて15名が出席した。座長を務めたのは堀内貞一である⁽⁹⁾。会合の様子を中嶋は以下のように描いている。

■北米日會の事業の一つである市民協会の規則が出来たので、一昨夜実業倶楽部内に、米國生れの十七才以上の女子と、廿才以上が男子とを集めて、協會組織の第一回の集會があつた

■集まる男女十五名、それに日會長や、創立委員が加はり、白いクロスをかけた卓を囲んで會議を初める、肉太の脂ぎつた委員は座長の席に就いて、規則の原案を説明する、無論英語だ、若い男女は静かに聴いゐる

■座長は最も力を入れ、協會設立の趣意と、その目的とに就いて再三説明を繰返す、脊型の青年は真面目に誠実に、要点に念を押して行く、小柄の才氣走つたレデーは質問を試みる

■「協會を設立するか否かゝ先決問題です」と、すらしとした若者は起立する、座長は「その通です、皆さんどう考へますか」と念を押す、會衆の眼は規則の原案にてつたりついて離れない

■「日系市民の内には、立派に發達した體育機關は既に設けられてあります、されど未だ精神修養や、思想の向上に對する設備はないのです、この協會はその目的を遂行し、優良なる市民を養成するもの諸君等自身の機關となるのであります」と座長の意氣頗る軒昂

■流石議事法の修養を積んだ小市民だけあつて、聊かも無作法はない、要点を會得して、大體の行く路に進まうと、極めて要領を得てゐる、會議振りに至つては、親爺と息子との間に、生蕃と文明人位いの相違はたしかにある⁽¹⁰⁾

この集会を受けて、シアトル革新市民協会が設立された。第一回の會議が開かれたのは9月27日、13名の日系市民に加えて、堀内貞一を含む4名の一世指導者が出席した。會議は規約の承認と創立委員の署名から始まったように思われる⁽¹¹⁾。

一世指導者たちが作成した規約原案とこの日決定された実際の規約とがどの程度異なっていたかは分からない。しかしながら、直前に設立委員たちが開催した準備集会に招かれたのは、すでに述べたようにアメリカ生まれの17歳以上の女子と20歳以上の男子であった。もしこれが規約原案中の会員資格に基づく決定であったとすれば、これは現代の我々同様に、当時の日系市民にとってもアンバラン

⁹ 同上、1921年9月13日及び9月16日。なお、13日の『大北日報』5面の記事では呼びかける日系市民は男子が17歳以上、女子が20歳以上でこれと逆になっている。しかし16日1面の中嶋勝治の「別口雑記帳」、5面の記事では女子が17歳以上男子が20歳以上となっている。前後の事情から13日の記事が誤っていると判断した。なお、「北米日會」=「北米日本人会」は「北米」と名乗っているが事実上は「シアトル日本人会」と名乗った方が適切なシアトルを中心とした地域の日本人会である。

¹⁰ 同上、1921年9月16日。なお、同日の5面の記事に記載され、竹内幸次郎『米國西北部日本移民史』の434頁に転載されている出席者名簿では14名である。しかしながら、名簿中の「大澤タマ」という日系市民は当時のシアトルには実在しなかったように思われる。存在が確認できるのは「大澤ハル」と「荒井タマ」の2人である。それゆえ私は、当日の集会に「大澤ハル」と「荒井タマ」の両方が出席しており、記者のミスで2人の姓と名前を組み合わせる1人にしてしまったのであろうと考えている。

スに思えたことであろう。第二次大戦後の新憲法を待たねばならなかった日本と異なり、ワシントン州ではすでに1910年に女性参政権が承認されていたからである。因みに合衆国全土で女性参政権が承認されたのは10年後の1920年である。したがってこの日採択された革新市民協会の規約の第3条では、男女の別なく、「法的年齢に達しているか、もしくは今後1年以内に成年に達するもの」と会員資格が定められている。

続いて役員が選出された。会長シゲル・オオサワ、書記ハル・オオサワ、会計ヘンリー・S・タツミの3名である。会長となったシゲル・オオサワはハル・オオサワの兄で、シアトルで最初に投票権を行使した日系市民であったと言われている⁽¹²⁾。

10月22日には市民協会の発足を祝ってレセプションが開催された。いわばお披露目であって重要な決定がここで成されたわけではないが、レセプションの様子を記した記事は、この協会に寄せた当時の日本人社会の指導者たちの期待を良く示しているように思われるので紹介しておきたい。

既報の如く沙都プログレッシブ、シチズンス、リーグの發會式ともいふべきレセプションは一昨土曜日夜實業倶楽部に於て開會せられたり北米日會にてはこの最初の試みなる有意義の會合を盛んにせんため準備滞りなく卓上は美麗なる花にて飾られレセプション氣分を煽れり司會者として堀内貞一氏市民協會設立の経過を述べ伊東北日會長、竹内大北日報社長、奥田米化委員長、松見聯絡日會長等の演説あり市民協會を代表し理事大澤春子嬢謝辞を述べ父母を代表し宮川万平氏挨拶をなし閉會せるは十一時なりき當夜のプログラムには巽清治郎氏はシーモア氏のピアノにて獨唱をなしガールズ連の合奏及びヴァイオリンの演奏あり興を得て近來になき清楚にして理想的なる米化的レセプションなりしといふ⁽¹³⁾

言うまでもなく、日系社会が市民協会に特に期待したのは合衆国市民としての権利を行使した政治への参加であった。「米国における大概の政治家は投票を吸収せんが為めには恥も外聞もなく心にも無い事を言つて迄も選挙民に媚びんとする著しい傾きがある、殊に一度排日問題になると之に反対した所で其の為め殆ど全く投票を得る見込が無いものだから、無茶苦茶に賛成して、我等に快からぬ分子の投票を得ようとするのが常」と慨嘆していた一世にとって、日系市民の有する投票権はまことに

¹¹ 創立メンバーとして同日付で規約に署名しているのは19名であり、しかも議事録には“All of the members whose signature appear therein was present”と記されている。『JACL シアトル支部の歴史』も“charter members”として19人の氏名を挙げている。しかしながら、竹内幸次郎の前掲書には「日會委員四名、日系市民十三名出席して」と記されている。6名は実際には議事録作成後に署名したのではないかと考えて、本文ではいちおう13名とした。しかし19名であった可能性も否定できない。“Minutes of the Seattle Progressive Citizens’ League”, Japanese American Citizens League, Seattle Chapter Records, University of Washington Library, Constitution, p.3, September 27, 1921; JACL, Seattle Chapter, JACL, a History of Seattle Chapter, p.2; 竹内幸次郎『米國西北部日本移民史』, 434頁, 参照。

¹² “Minutes of the Seattle Progressive Citizens League”, Constitution, p. 1, September 27, 1921. なお、シゲル・オオサワをシアトルで最初の有権者と考えたのは『クーリエ』の下記の文章に基づく。“At one time, and that a short while back, this community could not find one American-born Japanese of voting age. About fourteen years ago the one and only voter from the ranks of the American-born Japanese stepped out to do his duty at the polls. That was Shigeru Ozawa, the present head of the Citizens’ League here. Within the following several years a few more became of voting age to step along with Mr. Ozawa.” (Japanese American Courier, January 21, 1928) .

¹³ 『大北日報』, 1921年10月24日。

貴重なものであり、彼らがこれを活用して排日勢力との闘争を支援してくれることを望んでいたからである⁽¹⁴⁾。

市民協会設立後初の選挙は、1922年春のシアトル市長、市会議員等の選挙であった。合衆国では投票を希望する有権者は前もって登録の必要がある。ところがこの選挙の時の日系市民の登録率は当初きわめて低かった。そこで、懸念した市民協会の顧問たちが登録を奨励した結果、最終的に日系市民の登録者は14名となった。中嶋は3月30日の別口雑記帳で次のように記している。

■この十四人は完全に投票が出来る、即ち政事に參與して、各自己の意思を發表すべき段取りとなつた、十四の投票は少なりとも、日系市民の権利主張に向つて、確乎不動の礎石を据へた次第だ。

■在米同胞は、論理的は扱て置き、實際的に歸化権がない、従つて吾々自身は、さしあたりどの点からも政治に容喙する機會はない所謂政治上の無能力者だ。

■外國人は勿論、居住する國の政事に立ち觸るる道理はない、吾々は未來永遠歸化し能はざる外國人として差別的待遇受くるや否やは別問題として、日系市民が參政権を得たことによつて、大に慰むべき處がある⁽¹⁵⁾

続いて4月5日、市民協会は、日本を訪問した経験がありかねてから日系社会と親しい関係にあったワシントン州上級裁判所判事、オースチン・グリフィス Austin E. Griffiths を招いて選挙に関する教育集会を開催した。おそらく市民協会の顧問となっていた一世指導者を通じてグリフィスに依頼したのであろう。先に紹介した中嶋勝治の追憶はおそらくこの集会のことを意味していると思われる。

既報の如く昨夜八時より實業俱樂部ホールに於て日系市民協會開會巽氏司會しグリフィス判事を紹介し判事は市民の義務履行につき懇切なる講演をなし市民協會の有権者が市民たる義務の履行に際し心得べき條項を挙げ注意を與へ更らに會員の疑義質問に對し丁寧なる説明をなし且つ來たるべき選挙の議案内容及び候補者の事歴を語り孰れも得心する處ありたり終つてアイスクリーム、ケーキの饗應あり判事は趣味ある日本訪問談をなし快談を終り次にビヂネス、ミーチングを開らき、松見大八氏の希望談及び資金募集のことなど協議し散會せるは十時半當夜會員外の出席者は松見、奥田、伊東、中嶋、渡邊、有馬の諸氏なりと⁽¹⁶⁾

次の選挙は同年秋の合衆国及びワシントン州議会の選挙であった。この時も日系市民の有権者は14名だったようで、予備選挙当日の『大北日報』の論説は次のように述べている。

本日々系市民にして、選挙に神聖なる投票に參與するものは十四名であるさうな、其数は甚だ少ないけれども、何卒彼等は良心の判断するまゝに、有意義に投票権を行使せんことを希望す、何となれば在留同胞の將來の運命は、

¹⁴ 同上、1920年10月12日。

¹⁵ 同上、1922年3月30日。この直前の文章で中嶋は「切羽詰まつた前夜まで僅かに二三人だけ登録済であつた」と書いている。また、登録期限であった3月28日の『大北日報』は「本紙締切までに登録を終りたるもの」として日系市民9名の名前を列挙している。

¹⁶ 同上、1922年4月6日。

彼等の投票権を有意義に使用することに多くの関係を有するからである今後五年十年の後には、日系市民の投票資格者が大に増加するであらうが、吾人は之を何よりの寶として、之に多くの望を繋ぐものである⁽¹⁷⁾。

この選挙では、グリフィス判事自身が合衆国上院議員候補として共和党から出馬した。予備選挙は保守派の現職ポインデキスターと革新派候補者3人の争いとなった。革新派内部での調整が図られたが失敗に終わり、その結果革新派は共倒れとなっている。グリフィスも革新派の一人としてももちろん落選した。

この選挙戦の最中、排日協会 *Anti-Japanese League* が候補者を親日、排日、態度不明に分類したりリストを当時のシアトル日刊紙中もっとも排日的であった『シアトル・スター』*Seattle Star* に発表し、親日派とされたグリフィスがこれに反論するという事件があった。

この時グリフィスがスター紙に寄せた反論は、けっして親日の立場を放棄したわけではなかったが、やや断固さに欠ける点があり、その直後の『大北日報』には、それを不満とする論説が掲載されている。しかしながら私の印象では、グリフィスの反論は、彼なりに精一杯日本人を擁護した、有権者の目を意識せざるを得ない厳しい選挙戦渦中の候補者としては、かなり良心的な文章である。中嶋勝治もそう考えたようで、数日後の別冊雑記帳で、排日派の候補と比較しつつグリフィスについて「彼れは投票の数のために主義を曲げない程の高潔の士」と評している。親日と目されることが選挙できわめて不利に働き、候補者の大部分が排日派を標榜しているという状況の中での出来事であった⁽¹⁸⁾。

ともあれグリフィス判事は、その後も日系社会と親しい関係を保ち、革新市民協会に対しても協力を惜しまなかったようである。特筆すべきは、彼が1924年の排日移民法に反対し、書簡を送ったのみならずワシントンに赴いてクーリッジ大統領に拒否権の発動を求めたことである。彼は大統領本人には会えなかったが、秘書のバスコム・スレンプ *Bascom Slemp* と会うことができた。スレンプはグリフィスに、大統領も排日移民法案に反対しているが、先に拒否権を発動した復員軍人へのボーナス法案に引き続いてまたも拒否権がオーバーライドされることを恐れていると語り、今回は拒否権がオーバーライドされないという保証をグリフィスは有しているか、と尋ねた。グリフィスは、いわゆる埴原書簡に怒って法案を支持した議員の多くはすでに冷静になっているだろう、という彼の判断以上のものを提供できなかった。その後、グリフィスはスレンプの勧めに応じて国務省を訪ねた。そこで彼は、すでに国務省は排日移民法案に反対である旨を大統領に伝えており、これ以上のことはもはやで

¹⁷ 同上、1922年9月12日

¹⁸ 「『親日』と見られて居る者又は親日と決定する可能性ある者は至つて少数であるばかりではなく、其の『親日』なるものは我等の解する親日と異なり單に濃厚ならざる排日を指すに過ぎないらしく思はれる、之れは『親日』と目された候補の一人オースチン、グリス氏の發表した意見に徴して觀察される所、即ち所謂親日も亦一種の排日と解さるべきもの、」(同上、1922年9月6日、ただしこの論説が掲載された1面の日付欄は誤って5日になっている)。中嶋勝治の評論は9月13日に掲載されている。その他、7月15日、21日、8月25日、9月2日、5日等に関連する記事が掲載されている。また、*Seattle Star*, September 1, 4, 1922 参照。なお、1920年の選挙で労働農民党 *Farmer-Labor Party* の州知事候補ロバート・ブリッジズ *Robert Bridges* は排日運動を批判した。そのため労働農民党は共和党陣営によって日本人労働党 *Japanese Labor Party* のレッテルを貼られ大きな打撃を受けた。この選挙戦についてはさしあたり、黒川勝利『アメリカ労働運動と日本人移民——シアトルにおける排斥と連帯』(大学教育出版、1998年)90-93頁を参照されたい。

きない、と告げられたという⁽¹⁹⁾。

言うまでもなくクーリッジ大統領は拒否権を行使しなかった。排日移民法の制定は合衆国の日系社会を激しく失望させたのみならず、その後の日米関係悪化の重要な一因となった。

III

このような市民協会の活動の中心となったのが、ワシントン大学で社会学を専攻していたハル・オオサワであった。ハル・オオサワは市民協会のみならず誠友会、新進婦人会、ガールズクラブといった当時のシアトルの様々な日系人青年団体、少女団体でも幹部を務めていた。さらには「華州大學學生倶楽部のアクチーフ、メンバー」でもあった。ガールズクラブがワシントン大学演劇部によるアイランド劇を主催した時や新進婦人会とガールズクラブが家庭改善運動の一環として母子親善晩餐会を共催した時には、ハルが主催者として、あるいは司会者として挨拶した。オペラ歌手の三浦環がシアトルを訪問した際も、一世の女性を代表した山岡音高夫人とともに、二世の代表として歓迎の辞を述べている。当時の『大北日報』紙面に見るハル・オオサワの活躍はまことにめざましい⁽²⁰⁾。

それだけに、シアトル日系社会の将来を担う人材として、一世、二世を問わず、当時の人々が彼女にかけた期待は絶大なものがあつた。そのハル・オオサワが病に倒れ、1923年11月10日、活動半ばの早すぎる死を迎えたのである。日系市民運動にとってきわめて大きな打撃であつた。

しかしながら、ハル・オオサワが当時の日系市民運動の唯一の活動家だつたわけではない。この当時の二世でハルとならぶ将来のシアトル日系社会指導者と期待されていたのは、先に見た中嶋の1928年の回顧にもハル・オオサワと並んで名前が挙がっていた、当時ワシントン大学で法律学を学んでいたジョージ・ヤマオカ（山岡譲治）である。

シゲルやハルの父親であつた大澤保次郎もシアトル日本人社会の最古参として尊敬されていたが、ジョージ・ヤマオカの父山岡音高もまた、戦前のシアトル日本人社会を代表するいわゆる「元老」の一人であつた。山岡音高は、若くして岳南自由党を結成してその党首となつた、自由民権運動でも過激派の活動家であつた。いわゆる静岡事件の中心人物として無期懲役を宣告された音高は、北海道の刑務所において10年間苦役に服した後、特赦で出獄した。その後シアトルに移住し、高橋徹夫、築野又次郎とともに東洋貿易会社を設立して鉄道会社への労働者の供給に乗り出した。事業の傍らワシントン日本人会会長、小澤帰化問題委員長などで日本人社会のために献身的に尽くし、死後は太平洋沿岸日本人会協議会からも感謝の決議を受けている。移住後五男一女を設け、ジョージはその長男であつた⁽²¹⁾。

ハル・オオサワの死の直後の1923年11月12日の『大北日報』には、先に挙げた中嶋勝治の追悼文とともに、2人の二世の談話が掲載されている。一人は生前のハル・オオサワと個人的に親しかつた

¹⁹ Austin E. Griffiths, *Great Faith: Autobiography of an English Immigrant Boy in America, 1863-1950*, Seattle, 1950, pp.275-276.

²⁰ 『大北日報』, 1922年3月18日, 25日, 27日, 4月22日, 1923年4月3日, 11月12日。

²¹ 山岡音高の業績については西北部日系社会に関する多くの文献で紹介されている。さしあたり、藤岡紫朗『歩みの跡：北米大陸日本人開拓物語』（歩みの跡刊行後援会、ロサンゼルス、1957年）、293-312頁。

と思われる秋吉しづであり、もう一人がジョージ・ヤマオカである。ジョージの談話は「同胞第二世の指導者大澤春子嬢の永眠を聞き傳へた在留同胞は老若男女を問はず等しく痛惜の情にせまつてゐる同嬢とともに第二世の誘掖指導の任に當つた山岡讓次君は往訪の記者に語る」という前書きで紹介されている。

「同嬢とともに第二世の誘掖指導の任に當つた」という紹介、さらには中嶋勝治の先に見た回顧文の中の「故大澤春子嬢と、山岡讓治君が市民協會の牛耳」とっていた「日系市民最初の活躍時代」という記述に照らして、その当時ジョージがハルとならぶシアトル日系市民のリーダーと見られていたことはほぼ明らかである。またジョージの談話の中に、「私が昨年負傷入院中も隔日には屹度自分でコックしたものを持つて五分でも十分でも忙はしい中に慰問に来て呉れました」という文章があり、2人の間に日系市民運動の同志としての友情があったことをうかがわせる⁽²²⁾。

しかしながら、残された議事録や当時の『大北日報』に目を通したかぎりでは、ジョージの革新市民協會との関わり方はハル・オオサワほどではなかったように思われる。

1922年の、月日に関しては判読できずはっきりしないが、議事録の内容から3月か4月ではないかと思われる会合で、準会員 associate members を募るための委員会が設けられ、ミサオ・カワゾエとジョージ・ヤマオカが少年たち、トキ・ミヤガワとヌリ・カワゾエが少女たちの担当に指名されている。準会員の定義は議事録には記載されていないが、第二期における同様の決議から考えて、おそらく入会年齢に満たない日系市民を対象としたものであろう。また同じ会議で、ヘンリー・タツミが日本に発つため空席となった会計の補選が行われ、タマ・アライ、ミサオ・カワゾエとともにジョージも候補者の一人に指名されている。この時の選挙ではタマ・アライが8票で当選し、ジョージは4票だった。結局のところジョージは革新市民協會の三役には就かなかつたように思われる⁽²³⁾。

当時の『大北日報』を管見すると、ジョージ・ヤマオカについてはワシントン大学日本人学生クラブを根拠とした活動が目立つ。彼は、1921年から22年にかけてはE・マサトミとともに、22年から23年にかけてはF・ニシオとともに、23年から24年にかけては単独でこのクラブの書記を務め、先に挙げたハル・オオサワ死去の際の記事でも「華大學生俱樂部理事 山岡讓次君」と紹介されている⁽²⁴⁾。

²² 『大北日報』, 1923年11月12日。1922年8月に鉄道で働いていたジョージはトンネル内で発生した機関車と「プツシカー」との衝突に巻き込まれ大怪我をした。入院とハルの見舞いはその時のことを指していると思われる。同上, 1922年8月14日, 15日, 参照。

²³ *Minutes of the Seattle Progressive Citizens' League*, ca. February or March, 1922. 『大北日報』, 1922年1月28日。準会員 (ASSOCIATE MEMBERS) は、1929年3月9日の会議に提出された規約改正案の第3条では、“those, who have not attained legal age but are between the ages of 18 and 21, who shall have the right to participate in all the meetings and activities of the league except the right to vote and to hold office” と定義されている。なお、正会員 (ACTIVE MEMBERS) は “those, who have attained the legal ages of 21 years” であり、1921年創立時の規約と比べると、“those who will reach their majority within one year therefrom” の地位が異なっている (*Minutes of the Seattle Progressive Citizens' League*, March 9, 1929)。

²⁴ *University of Washington Nikkei Reunion: Commemorating the 75th Anniversary of the University Students Club, (1922-1997)*, Seattle, Washington, August 16-18, 1997, University of Washington Library, p.12. なお、学生倶楽部の役員のほとんどは男子だが、1917年から18年にかけての書記は Miss Yuki Osawa と記されている。茂の妹、春子の姉である大澤雪であろう。

当時のシアトル日系社会にとってワシントン大学に通う日本人や日系市民の増加は、希望であり誇りであった。彼等の期待は学生会館建設のための募金運動となって現れ、1921年末には地上2階、地下1階の会館が完成した。寄宿舎として利用できるのは男子学生だけであったがラウンジなどの施設は女子学生も利用可能であったから、社会学を学ぶハル・オオサワも利用したであろう。学生クラブの会員資格は「人種、国籍、あるいは宗教に関係なくあらゆる学生」に開かれていたというが、日本人学生、特に英語を母語とする日系市民がその活動の中心となったであろうことは、当時の役員名簿等から容易に推測しうる。書記であったヤマオカがここを根拠に活動したのも当然であった⁽²⁵⁾。

同年5月に開かれた学生クラブ主催の演説会には、弁士の一人としてヤマオカも登場している。演題は「米國魂」であった⁽²⁶⁾。また、当時の『大北日報』に目を通して特に印象に残るのは、1924年にインディアナポリスで開かれた世界学生大会への出席である。この学生大会にはワシントン大学から約40名が出席し、フランク・ニシオとジョージ・ヤマオカの2人が日系人であった⁽²⁷⁾。

しかしながら、ハル・オオサワが日系市民協会の書記でありながら同時に学生クラブの「アクチーブ、メンバー」であったのならば、ジョージ・ヤマオカが学生クラブの書記であって同時に日系市民協会の「アクチーブ、メンバー」であったとしても、まったく不思議はない。

しかしながら、シアトルの日系市民運動は、ハル・オオサワの死後まもなくジョージ・ヤマオカをも失うことになる。ジョージがワシントン大学卒業後シアトルを離れて東部に移り、ワシントン特別区のジョージタウン大学大学院に進学したからである。彼は1928年にジョージタウン大学で法学博士号を取り、1931年にニューヨークの法律事務所のアソシエイトとして弁護士としての活動を開始した。1940年には同じ事務所のパートナーに昇格した。その間、1928年から29年にかけては在米日本総領事館の顧問、29年から30年にかけてはロンドン海軍軍縮会議日本代表団の顧問等を務めている。また在学中にはジョージタウン・ロー・レビュー *Georgetown Law Review* のビジネス・マネジャーも努めている。

東部への移住の結果としてジョージは、カリフォルニアやワシントン州にとどまった日系人とは異なって、真珠湾攻撃後も強制収容されることなく、法律家としてのキャリアを積むことができた。その経験を踏まえて彼は、第二次世界大戦後、極東軍事裁判におけるA級戦犯の弁護人として日本に赴く。日本語と英語の双方に通じているのみならずその能力、識見を高く評価されたジョージは、この裁判で事実上弁護団の要としての役割を演じた。その後も彼は弁護士として多くの日米企業に関係し、1981年11月にニューヨークで死亡するまで日米関係の改善のために努力した⁽²⁸⁾。

このように東部への移動は、その後のジョージ・ヤマオカの人生にとって重要な転機となった。し

²⁵ Ibid., p.9によると学生会館が法人として成立したのは1922年のようであるが、1921年12月8日の『大北日報』によると同年12月9日に竣工式が行われたようである。なお設立の際の事情は、竹内幸次郎『米國西北部日本移民史』、440-442頁、参照。

²⁶ 演説会のプログラムは『大北日報』、1922年5月3日に掲載されている。また4月29日号に予告の記事がある。

²⁷ 「華州大學日本人學生俱樂部より來廿八日よりインデヤナ、ポリス市に開會の萬國學生大會に代表者を派遣することは既報の如くなるが一昨夜同俱樂部にて代表者を選擧したるに西尾フランク山岡ジョージの二氏當選したり代表者は明後月曜日當地出發二十七日開催地に着翌日より開會の大會に出席し一月一日開會〔ママ〕後直ちに帰途につき同日當地着の筈」(『大北日報』、1923年12月22日)。また、1924年1月9日、22日の同紙参照。

かしながら、それによってシアトルの革新市民協会はハル・オオサワに続いて献身的な活動家を失うことになったのである。

もっとも、ハル・オオサワとジョージ・ヤマオカがいなくなったからといってただちに市民協会が活動を停止したわけではない。その後の市民協会の動きを、残存している議事録に基づいて概観してみよう。

まず目につくのは、日系市民の政治意識を高めて投票に参加させるための努力である。たとえば1924年1月19日の会合では、来るべき選挙に備えて名簿未登録者に登録を勧告奨励すること、市長と同時に選出される郡、市、州の様々な役職に立候補している候補者の政党と綱領とを、それぞれ3人の担当者で手分けして調査し、次の会合でその結果を報告すること、また市長候補者の一人を招いて演説を聴く、という決定が成されている。市長候補者への依頼は、顧問として同席していた奥田平治に委ねられたようである。なおこの会議で、死去したハル・オオサワに替わってトキ・ミヤガワ（宮川言子）が全員一致で新書記に選出された。

また、同年11月3日には、その翌日に迫った大統領選挙に関する議論が行われ、1926年1月7日の会合では、次の市の選挙の直前の土曜日に次の会合を開くこと、その会合に奥田平治を招き、候補者について議論することが決定されている。

会員拡大のための努力も続けられた。1924年11月22日の会合では、ワシントン大学学生倶楽部、誠友會など、当時のシアトルの日系市民関係の諸団体の代表者会を、同月の27日に日本人実業倶楽部で開催することが決定されている。因みに、連絡すべき団体の代表者として挙げられているのは、フランク・ニシオ、リチャード・ヒライ、M. キムラ、タケヤ・アライ、ミヤザワ、セルマ・オカジマの6名である。また1926年1月7日の会合では、新会員獲得のためにシゲル・オオサワが大学学生倶楽部に出席すること、キヨ・アリズミ（有泉清子）が芙蓉会（ワシントン大学に通学する女子学生の会、1925年創立）の会員に話をするという計画が話し合われている⁽²⁹⁾。

今一つ注目に値するのは、カリフォルニア州の日系市民団体、アメリカ忠誠協会との関係である。1924年9月5日と11月24日の議事録には、忠誠協会が11月28日、29日の両日にサンフランシスコで開く大会に、革新市民協会代表の出席を求めてきたことが記されている。討議の結果、シアトルからはシゲル・オオサワとタケヤ・アライの2人を代表として派遣することになった。またその費用は諮問委員会の松見大八が工面することになった。なお、今回の代表が2人も男性となったからであろう、次の大会には少女2人を派遣するという提案が出されている⁽³⁰⁾。

²⁸ Barry Ryan, "Yamaoka, George", John A. Garraty, Mark C. Carnes, American Council of Learned Societies, *American National Biography*, vol. 24, 1999, p.101; *Japanese American Courier*, January 21, 1928. 東京裁判におけるジョージ・ヤマオカについてアーノルド・C・ブラックマンは次のように述べている。「まことに誠実な人物であった山岡は、あらゆる方面から尊敬され、弁護団における日本人弁護団とアメリカ人弁護団の橋渡し役という評価を受けたのである」（アーノルド・C・ブラックマン（日暮吉延訳）『東京裁判—もう一つのニュルンベルク』132-133頁）。また、日暮吉延「東京裁判の弁護側—日本人弁護団の成立とアメリカ人弁護人」（『社会科学雑誌』（鹿児島大学）第16号、1993年、48頁、参照。

²⁹ *Minutes of the Seattle Progressive Citizens' League*, January 19, November 22, 1924, January 7, 1926. また、『大北日報』、1924年1月21日、竹内幸次郎『米國西北部日本移民史』、442頁を参照。

正会員、準会員を問わぬ拡大のための努力、選挙の際の有権者登録の呼びかけ、立候補者の政見調査や市民協会主催の演説会、さらには他の地域の日系市民政治組織との連携といった活動は、いずれも後に第二期のシアトル革新市民協会が熱心に取り組むことになる事業である。このように1926年までの議事録を一読すると、そのほとんどがすでに第一期においても努力の対象となっていたことが分かる。すなわち第一期の市民協会は、ハル・オオサワとジョージ・ヤマオカという有力なリーダー2人を失った後も、第二期以降の活動と比較するとたしかに小規模なものであり、また一世の有力者たちの支援にかなりの程度依存しながらも、日系市民の政治的影響力の拡大という目的に沿って活動を続けていたのである。

しかしながら設立当初の、ハル・オオサワの活動によって支えられていた時代の活気は、やはり衰えていったようである。1927年、今や沈滞しきった市民協会の状況を中嶋勝治は次のように嘆いている。

■シヤトル、グログレヴシーヴ、シチズ海 [ママ] ス、リーグと名乗つて、同胞二世の市民團體が組織され、度々集會したのは五六年の昔であつた

■その後、さつぱり音沙汰がなくなり、存立の程も疑はるやうになつた。先頃聯絡日本人會協議會にもその議が出て、どうかして市民協會の基礎を固くし、各地の聯絡をとらせたいと一つの決議さへあつた

.....

■市民協會の盛んな時代には有力なリーダーがあつて、會員の結束、集會の準備、議すべき問題から、レフレツシメントの献立まで、責任を以て背負つて立つた、會員もその熱心に引かれて勢よく集まつた

■惜しいことに、そのリーダーは亡くなつた、それからいつ消えともなく、熱も煙もなくなつて仕舞つた、リーダーを失つたことが、市民協會が今日のように寂しくなつた原因だ⁽³¹⁾

新たなリーダーが登場してシアトル革新市民協会が活動を再開するのは、その翌年、1928年初頭のことであった。

IV

1928年1月1日、ボクシングで失明してシアトルに戻ったジェイムズ・サカモトが北米で初めての

³⁰ *Minutes of the Seattle Progressive Citizens' League, September 5, November 24, 1924.* Roger Danielsによると、この会議には北カリフォルニアの5つの支部の33人の代表とシアトル革新市民協会の2人の代表が出席した。ダニエルスは *Progressive Voters League* と記しているが、*Progressive Citizens League* の誤記であろう。Roger Daniels, *Asian America: Chinese and Japanese in the United States since 1850*, University of Washington Press, 1988, pp.179-180. また、アメリカ忠誠協会の1920年代の活動については、Hosokawa, *Nisei: the Quiet Americans*, pp.192-195が触れている。

³¹ 『大北日報』、1927年7月7日。しかしながら、"It started with a nucleus of nineteen members which later increased to sixty and more. Their first president was Shigeru Ozawa, one of the first Japanese boys to be born in the Japanese community here. This same League through a thorough canvass today would probably include more than a hundred members on its rolls" という半年後の『クーリエ』の記事が正しいとすれば会員数は第一期の終わりまでに60数人に増加したことになる。*Japanese American Courier*, January 21, 1928..

二世による英字週刊紙、『ジャパニーズ・アメリカン・クーリエ』の発行を開始した。赤字に悩まされながらも『クーリエ』は、妻ミサオの献身に支えられて、1942年の日系人強制収容に至るまで刊行を続ける⁽³²⁾。このことがシアトルにおける日系市民の政治活動の復活、私が第二期と呼ぶ時代の始まりの契機となった。

創刊直後の『クーリエ』がもっとも強調したのが市民協会の再建であった。活動を休止していた市民協会もそれに応え、書記ジョージ・イシハラは、『クーリエ』の紙面も使って、古くからの会員と会員資格のある日系市民に1月28日に開かれる会合への参加を呼びかけた。1月28日の会合では、シアトルにおける最初の日系市民弁護士、クラレンス・タケヤ・アライが、創立以来のシゲル・オオサワに代わって新たな会長に選出された。アライは、サカモトやイシハラと協力して精力的な活動を開始し、1930年代のシアトル革新市民協会を引っ張っていくことになる。アライと同時にジョージ・イシハラが書記に、ユキ・ヒガシが会計に選出されている。ジョージ・イシハラは、1928年から30年のアライ、31年のサカモトに続いて32年から33年にかけて市民協会会長を務めることになる⁽³³⁾。

新体制発足にあたって書記、会計に就任したジョージ・イシハラとユキ・ヒガシは、1921年9月の創立集會に出席して協規約に調印した19人のうちに名を連ねている。ジョージ・イシハラはまた、1923年2月4日に副書記 Assistant Secretary、1924年11月には書記に就任していた。タケヤ・アライも、すでに述べたように、1924年にサンフランシスコで開かれたアメリカ忠誠協会の大会に、シゲル・オオサワとともに革新市民協会の代表として派遣されている。実のところ、アライは1901年の生まれであるから1903年生まれの子ジョージ・ヤマオカよりもわずかながら年上である。すなわち、第二期の指導者の多くは、ハラ・オオサワやジョージ・ヤマオカと同じ世代に属しており、すでに第一期の市民協会においても活動していたのである⁽³⁴⁾。

このように第一期のメンバーが7年後の1928年の再出発にあたってのリーダーであったという事実は、別の角度から見ると、第一期の日系市民運動の中心的活動家が成年に達したばかりの学生たちだったのに対して、第二期の指導者の多くは、弁護士のタケヤ・アライを初めとする職業人であったということの意味している。それゆえ、第一期の運動が資金面をはじめとして様々な形で一世指導者たちに依存していたのに対して、第二期の指導者たちはかなりの程度独立して運動を進めていく力を持っていた。加えて組織化の対象となる日系市民有権者が増えており、しかも年々増えつつあるという状況を背景として、彼等は全国 JACL の結成に取り組んでいくのである⁽³⁵⁾。

³² Mayumi Tsutakawa, "The Political Conservatism of James Sakamoto's Japanese American Courier", Master of Communications Thesis, University of Washington, 1976, pp.20-24.

³³ *Japanese American Courier*, January, 21, January 28, February 4, 1928. Japanese American Citizens League, Seattle Chapter, *JACL, a History of Seattle Chapter*, p.12. 奇妙なことに市民協会の議事録では1928年1月24日ではなく1月3日に会合が開かれ、会長アライ、書記イシハラ、会計ユキ・ヒガシが選出されたことになっている。誤記と思われる。See *Minutes of the Seattle Progressive Citizen's League*, January 3, 1928. なお、タケヤ・アライの父、荒井達弥もまた自由民権運動の活動家として青年時代を送っている。藤岡紫朗によれば、ジョージ・ヤマオカの父である山岡音高とはかつて志を同じくした者として「悪口はいい合う」が親しい仲であったという。藤岡紫朗『歩みの跡』、325頁、参照。

³⁴ "Minutes of the Seattle Progressive Citizens' League", February 4, 1923. ジョージ・イシハラがいつ書記に選出されたかは議事録では不明だが、11月3日の会議までは "Asst. Secty.", 11月22日の会議から "Sec." の肩書きで議事録が記録されている。

他方で、彼ら第二期の指導者、特に再建後に最初の会長となったタケヤ・アライ、また彼に続いて会長となったジェームズ・サカモトが追求した市民協会のあり方、運動の方向は、第一期の革新市民協会を引っ張ったハル・オオサワのそれとはかなり異なっていた。『ジャパニーズ・アメリカン・クーリエ』の論説を吟味したマユミ・ツタカワ、ユージ・イチオカ、ジェリー・タカハシなどは、サカモトが白人社会による日系人差別と戦い、白人に人種差別を廃止するように要求するというよりもむしろ二世に対して、忠誠なアメリカ人であることを示しその事実をもってアメリカ社会に受け入れられるよう努力するよう求めていたという結論で、ほぼ一致しているように思われる。黒人運動に照らして言うならば、W. E. B. デュボイスやナイアガラ運動ではなくブッカー・T. ワシントンとタスキーギ運動に近い立場をサカモトは採ったのである⁽³⁶⁾。このような第二期の革新市民協会主流派の方針は、1930年代の後半ともなると、より若い世代の日系市民を中心とした革新的な勢力との対立を引き起こす。そしてその対立は、当時の合衆国西北部の日系社会において重要な収入源となっていたアラスカ・カナリーの組織化をめぐる闘争において明確になる。

1920年代末から30年代になると、シアトル以外の西北部諸地域でも日系市民協会が設立される。その多くが、シアトル同様に日系市民の中ではかなり恵まれた専門職従事者を指導者とする保守的な組織であったように思われる。ヤキマ支部の会員メアリ・サキムラは、1941年3月にそのような状況を批判し、市民協会は専門職の二世のみではなくあらゆる市民と外国人、日系人以外のマイノリティ、カナリー・ワーカーのような労働者の福祉にもっと目を向けるべきである、と主張する書簡をサカモトに送っている。おそらくこれこそが、もし第一期の市民協会にそれだけの力量があったならば、ハル・オオサワが目指していたであろう方向であった。ジョージ・ヤマオカは彼女を追悼する談話の中で、「ミス大澤の學問研究は無産階級の向上と労働階級を現下の憐むべき状態から救ふが目的で随分激越な議論をして男子をへこました」と語っているのである⁽³⁷⁾。

V

しかしながら、再建直後のシアトル革新市民協会の活動、それは春のシアトル市長選の際の有力候補陣営から代表を招いての政見報告会の開催、秋の大統領選挙に備えて行われた共和党支部パレードへの参加など、かなり積極的なものであったが、その中には後にメアリ・サキムラが主張したような日系市民と他のマイノリティとの連帯に繋がる可能性を持ったものも含まれていた、という事実もまた、最後に指摘しておきたい⁽³⁸⁾。

特に注目すべきは、1928年11月のワシントン州下院選に立候補した黒人、ホレイス・ケイトン・ジュ

³⁵ これはもちろん両期の中心的活動家であったハル・オオサワ、ジョージ・ヤマオカとタケヤ・アライ、ジェームズ・サカモトの対比を念頭においている。例外も多い。たとえばシゲル・オオサワは1891年の生まれである。

³⁶ Tsutakawa, "The Political Conservatism of James Sakamoto's Japanese American Courier", pp.36-44; Yuji Ichioka, "A Study in Dualism: James Yoshinori Sakamoto and the Japanese American Courier, 1928-1942", *Amerasia*, 13-2 (1986-87), pp.49-81; Jere Takahashi, *Nisei/Sansei: Shifting Japanese American Identities and Politics*, Temple University Press, 1997, pp.53-65, 参照。

³⁷ Tsutakawa, "The Political Conservatism of James Sakamoto's Japanese American Courier", p.38; 『大北日報』1923年11月12日。

ニアと市民協会との関係である。1928年8月28日の『大北日報』は次のような記事を掲載している。

既報の如く昨夜八時シヤトル、プログレシーヴ、シチズンズ、リーグはブッシ、ホテル廣間に集會し共和黨合衆国上院議員候補者判事オースチン、グリフィス氏の政見を聴いた出席者は市民有権者三十餘名及び七八人の有志招待を受けた

荒井威彌會長司會し先づシヤトル市第四十三區より名乗りを擧げた華州下院議員候補者黑人ケートム氏を紹介し氏は政見の一端を演説し次にグリフィス氏は過去政界に於ける経歴と上院議員としての抱負を述べ後援を求め

拍手裡に演説を終りグリフィス共和黨俱樂部イタリヤ人委員を代表してダヴィド、プラゾー氏は伊太利人側がグリフィス判事の選舉運動に盡力せる模様を語り日系市民の協力を求めたそれよりレッレッシメントに移り主客歓談に時を移し散會したのは十時頃であつた⁽³⁹⁾

ここで「ケートム氏」と書かれているホレイス・ケイトン・ジュニアは、シアトルにおける黒人社会の歴史を語る時に欠かせないケイトン一族の出身である。その父ホレイス・ケイトン・シニアは南北戦争直前のミシシッピ州に奴隷として生まれた。プランテーション・オーナーの娘と黒人奴隷との間の子であったという。再建期の終わりにミシシッピ州から西部に移住し、1890年に黎明期のシアトルに落ち着いた。まだ黒人の数が少なく人種差別も強くなかった1894年から1913年にかけて、『シアトル・リパブリカン』*Seattle Republican*を発行し、政治的にも経済的にも大きな成功を収めた。一時はワシントン州共和党にも影響力を有していた。その当時、Nishという日本人をスクールボーイとして雇い、ほとんど家族の一員であるかのように親しくしていたことが後のケイトン・ジュニアの自伝に描かれている。その後のシアトルにおける黒人の増加、人種差別の強化とともに白人社会への影響力を失い、経済的にも苦しくなっていたが、黒人社会においては指導者であり続けた。ケイトン一族を研究したリチャード・S・ホブスは、「ホレイスはすべての抑圧された人々の権利のための雄弁な声としてとどまり、その当時強まりつつあった偏見と差別に対して強く反対した」と述べている。彼の妻、つまりホレイス・ジュニアの母は、合衆国最初の黒人上院議員でアルコーン大学学長になったハイラム・ローデス・レヴェルズの娘である。またホレイス・ジュニアの弟であるレヴェルズ・ケイトンは、後にアメリカ共産党に入党し、CIO系労働組合の指導者として活動した。1950年代にブラック・パワーのスローガンを用いた最初の活動家たちの一人であったという。最後にホレイス・ジュニア自身であるが、この当時はワシントン大学で経営学を学びながら副保安官を務めていた。後にシカゴ大学の大学院に進み社会学の分野で注目すべき業績を残す⁽⁴⁰⁾。

³⁸ 市民協会としてはおそらく候補者本人の出席を期待したのであろうが、実際に出席したのはいずれの陣営とも候補者本人ではなく Secretary であった。増加したとはいえ、当時の日系有権者数ではまだ忙しい候補者本人を呼ぶには力不足だったのであろう。また、共和党のバラードに参加したのはクラレンス・アライをはじめとする市民協会内の共和党支持者である。See *Japanese American Courier*, February 11, 25, March 3, July 7, 1928.

³⁹ 『大北日報』, 1928年8月28日。先に述べたように中嶋勝治はこの集會を觀察し、ハル・オオサワとジョージ・ヤマオカが活躍した時代を想起している。

⁴⁰ Richard S Hobbs, *The Cayton Legacy: An African American Family*, Washington State University Press, 2002, xiii-xv, pp.81-82; Horace R. Cayton, *Long Old Road*, New York, 1965, pp.7-8.

市民協会の集会におけるラルフ・ケイトンの演説の様子を『ジャパニーズ・アメリカン・クーリエ』は次のように紹介している。

当地区から州議会に立候補しているパニック保安官事務所の黒人副保安官、ホレイス・ケイトンもまた、その夕方の弁士の1人であった。彼は聴衆に向かって、このコミュニティの第二世代が直面してきた問題は、自分たちが闘ってきた問題とほとんど同一であると述べた。

「日本人青年の今日の問題は」と、彼は言った。「我々が直面している問題といかなる相違もない。その解決策を発見することは両者にとって利益であり、したがって幸いなことに、我々には相互に理解しあえる立場にある。」

ケイトン氏は、マイノリティの声はあらゆる立法において尊重されるべきであり、当然の考慮を払われるべきである、と述べた。日本人グループと黒人グループは市と州においてマイノリティを構成しており、自分は州議会において彼等の大義のために闘いたいと希望している、と主張した。

同日の『クーリエ』には他にも、集会の様相を伝えるのと同じ第1面に、「マイノリティを擁護する Champions Minorities」というキャプションのケイトンの写真、「日本人の友人たちの支持と協力へ感謝しマイノリティへの支援を約束する」声明などが掲載されている。その中でケイトンは、「州議会のメンバーとして私は、いかなる時もあらゆるマイノリティの権利と名誉のために戦う。マイノリティに対する人種、色、信条を理由にしたいいかなる差別や不当な立法も私は見過ごさない」という決意を表明している。さらに第4面には、第1面に掲載されたものと同じ写真を用いてケイトンへの投票を呼びかける、かなり大きな広告も掲載されている。このように、1928年の州議会選挙に際して、市民協会と『クーリエ』は、少なくとも当日の『クーリエ』の紙面から読み取るかぎりにおいてはかなり熱心に、第43選挙区の候補者として、唯一の黒人候補ホレイス・ケイトン・ジュニアを推していたように思われるのである⁽⁴¹⁾。

ホレイス・ケイトン・ジュニアが革新市民協会の集会に出席するまでの経緯、また彼と日系人社会との当時の関わり方の詳細については『クーリエ』にも『大北日報』にも記されていない。管見したかぎりではケイトン・ジュニアの自伝やケイトン一族に関するホブスの書にも、1928年のワシントン州議会選への出馬についての言及はないようである。それゆえ、この事件がどの程度当時の日系市民協会の政策や傾向、あるいは決意を反映したものであったかを、今にわかに判断することはできない。すなわち、単にケイトン陣営からの申し入れを市民協会が受け入れただけのことであったかも知れない、という可能性を否定できない。

しかしながら、市民協会がもしも複数の候補者の中から特に黒人候補を選んで集会に招いたのであれば、当時の市民協会は、「革新市民協会」というタイトルにふさわしい第一期のハル・オオサワの精神、後にメアリ・サキムラが望んだような方向への可能性を持ち続けていたのではないかとと思われるのである。

言うまでもなくそのような可能性は、存在したとしても実現はしなかったように思われる。全国

⁴¹ *Japanese American Courier*, September 1, 1928.

JACL 同様にシアトル支部においてもまた、日系市民の合衆国への忠誠を誇示することによって白人主流派への統合を図るという方向が支配的になっていったのである。

最後に2点付け加えておきたい。

まず選挙の結果であるが、結局のところ予備選挙におけるケイトンの得票数は686票にとどまり、第43区の共和党予備選候補者4人中の3位に終わった。1位の候補は1313票を獲得しているから当選ラインからほど遠かった。もっとも、この6年後に合衆国西北部の日系人として初めて公職に挑戦したクラレンス・アライは、得票数320票、第37選挙区の共和党予備選候補中4位という結果に終わった。これと比べると善戦であったとも言える⁽⁴²⁾。

第2に、グリフィス判事と同様にケイトン・ジュニアもまた、日本人に対する好意を失わなかった。すでに述べたようにケイトン・ジュニアは、その後シカゴ大学の大学院に進んで社会学者としての道を歩み始めた。真珠湾攻撃後、強制収容を逃れるために一部の日系人たちは東部に向かい、一部はシカゴに到着する。ケイトン・ジュニアはこの困難な状況に置かれていた日系人を支援するために全力を尽くしたと言われている⁽⁴³⁾。

⁴² *Seattle Times*, September 13, 1928.; Takahashi, *Nisei/Sansei*, p.65

⁴³ Hobbs, *The Cayton Legacy*, p.133. Hobbs は、この箇所の記述は社会学者 Setsuko Nishi が 1970 年にシカゴで開かれたシンポジウムに提出した論文、及び彼女に対して Hobbs が行ったインタビューに基づく、と記している (*ibid.*, p.225)。

The Japanese American Citizens' Movement in Seattle, 1921-1928

Katsutoshi Kurokawa

In September 1921, the Seattle Progressive Citizens' League was formed with the help of the North American Japanese Association. Led by Haru Osawa, the Secretary, the League started various activities to increase the political awareness of the second-generation Japanese Americans. Haru's eagerness and leadership ability aroused the hope of people for the future of the League. George Yamaoka, the Secretary of the University Student Club, was also eager for the empowerment of the status of the Japanese Americans in those years.

In November 1923, however, Haru Osawa departed this life too young. George Yamaoka also left Seattle to go on to the graduate school in Washington D.C.

After the death of Haru Osawa, the League continued to try to improve the conditions of the Japanese Americans in Seattle. It made efforts to increase the membership. It tried to increase the voter turnout of the Japanese Americans. And it sent delegates to the conference of the American Loyalty League, its counter part in California. The vigor of the years when Haru Osawa had been leading the League, however, was gradually lost.

In 1928, James Sakamoto began to publish the *Japanese American Courier* and the League was reorganized under the leadership of Clarence Takeya Arai.